
他称魔王 × 自称自衛官 × 三等自営業 プロローグ

kaitahito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他称魔王×自称自衛官×三等自営業 プロローグ

【Nコード】

N4418J

【作者名】

k a i t a h i t o

【あらすじ】

鬱だ。死のう。

金もなければ仕事もない、頼る仲間も一人も居ない、ついでに度胸もない男。岩塚勝彦（26）はある日突然、異世界に召還されてしまい、魔王候補に選ばれてしまう。こうして、彼の魔王を目指す日々が始まった。

鬱だ。死のう。

夜中、自宅のガレージで岩塚勝彦は首を括ろうとしていた。

死後の始末を考えて新聞紙を敷き、

首吊り用に立てた台の上で人生の思い出を振り返っていた。

金がなくて、将来に絶望して、疲れきっていた。

働くための職もなかった、あつたとしても職歴前提で彼の採用は
門前払いであった。

出来る仕事は日雇い労働、就職氷河期と呼ばれているこの時代、
そつした仕事を続けることさえも困難であった。

歳は20の半ばを超え、新卒採用を逃した彼を雇う先はなかった。

勝彦は焦っていた。追い詰められて自殺さえ考えるほどに。

同期の仲間は皆就職し安定した生活を築きつつある。

友人達は皆卒業と同時に就職が決まり、出世し課長や店長ばかりに
なっていた。

気が付くと、フリーターで就職せずバイトで日々を食い繋いでいる
のは彼だけだ。

なんとなくつけっぱなしにしておいたテレビでは食べ放題特集を
やっていた。

タレントが内輪話をして好き放題に食べて適当にコメントするだけ
の番組だ。

こいつらふざけやがって。芸能人が芸を売らなくてどうする。

「うんまーい！」

一食数万円もする豪華な夕食を食べたタレントが喜ぶ表情に勝彦の
妬みが刺激される。

勝彦の目から涙が垂れた。

「どいつもこいつも美味そうに喰いやがって」

今まで文句を言いながらも養って来ていた両親は他界した。世は不況で就職氷河期。

職業安定所は失業者で溢れ、新卒の若者までもが職にあぶれる。

少子高齢化が進み、政府は高齢者保護を優先した結果、若者へと金が廻らずこの先景気が好転しないであろうことは明白であった。

新卒のうち非正規雇用が多くを占めるパートタイムの仕事に就いた数は前年の約八割。

派遣社員どころかアルバイトの雇用さえ減少していた。

もちろん、正社員など望むべくもない。

だんだん歳をとってきた勝彦を日雇い労働者の雇用側さえ必要としなくなってきているのを肌で感じていた。

歳は今年で26、30の大台まで4年しかなかった。

「クソッ……」

勝彦に逃げる場所はなかった。

両親からは嫌われ家に居辛かったし、友人に迷惑は掛けられないと勝彦は思っていた。

アパートを借りるにもアルバイト暮らしには難しかった。

心は自身への苛立ちと両親への申し訳なさで潰れていた。

現実から逃避する金もなく、相談できる友や一緒に発散できる仲間もいなかった。

居ても彼らは遠く先に行っていた。

仲間はどこそこの専務であり、課長であり、華々しい活躍をしていた。

まぶし過ぎて眼を向けていられなかった。

元仲間と同席するのが恥ずかしくて情けなかった。そして仲が良かった親友とも会わなくなった。

彼以外は 皆優秀であった。

彼はいつも劣等感に苛まれていた。

「金持ちの子供だったら口利きがあつてこんなこと悩まずに済むんだろ。」

ファンタジーの魔王だったらもつと楽だな。

何も考えずに勇者と戦つていればいいんだからな」

なんとなく思った。

死ぬまでの時間を引き延ばすただの現実逃避である。

無駄なことを考えていれば気が紛れた。

首吊りロープを用意して台に立ったのだ、

ここまで用意して死ねませんでしたと身を引くのは躊躇われた。

「ワハハハハハッ」

「さて！こちらの値段は？なんと3000円、山村大誤算！」

テレビでは挿入されたわざとらしい笑い声と、

何が面白いのか判らない解説が流れている。

カメラが皿をズームすると一品5000円もする贅を尽くした食事が現れた。

食事は一食あたり5万円、勝彦の仕事約60時間分の贅沢である。

勝彦の食事代は一食600円に満たない。

心は勝彦自身への苛立ちと両親への申し訳なさに潰れていた。

現実から逃避する金もなく、相談できる友や一緒に発散できる仲間

もいなかった。

居ても彼らは遠く先に行っていた。

仲間はどこそこの専務であり、課長であり、華々しい活躍をしていた。

まぶし過ぎて眼を向けていられなかった。

元仲間と同席するのが恥ずかしくて情けなかった。

画面には芸能人の姿が映っていた。

高い鼻と生気に満ちた瞳、細面で白い肌の品の良いスーツを着た、最近売り出し中の芸能人だった。

彼が柔らかな笑みを浮かべるたび観客が騒ぎ、会場は歓声で満たされる。

東京の一等地に屋敷を構え、両親共に芸能界で大きな発言力を持っている。

あらゆるスポーツをこなし、声は自身に満ち、彼の行くところ観客は皆魅了された。

一方勝彦は貧困から抜け出そうとするための時間も余裕もなかった。

彼は今している仕事を嫌っていた。

そこから抜け出したかった。

日雇い労働から帰ってくる、飯を食べる泥のように眠る繰り返し。いくら働いても生活は楽にならなかった。

だから死んで逃げようとした。

「死のう」

「あきらめんなよおお！夢は起きて見るものなんだよお！

あきらめんなよ！どうしてそこでやめるんだそこで！ ダメダメ

ダメダメ ダメダメ」

熱血で有名なタレント、修三がスポーツ解説をしていた。相変わらずうざい、嫌悪すら勝彦は感じた。

いくら熱血したところでどうにも出来ないものもある。人は蝶になれない。

勝彦にも修三のように理想に燃えていたときがあった。だが人は成長するにつれ現実と身の程を知るものだ。

全てをあきらめた勝彦には、どうして彼らが熱狂するのか理解できなかった。

テニスに燃える子供も、天才少年を仕立て上げようとする親も、彼のファンも。

「死ぬか」

「そうだ！」

「死ぬ」

「もつと大きな声で！」

勝彦は修三を冷めた眼で見ている。

どうせ修三が番組で指導している子供の何割かは数年以内にテニスをやめ、

更に数年後には自ら限界を悟って辞めるのだ。

残るのはほんの一握りに過ぎない。

もしかしたら誰も残らないかもしれない。

未は博士か大臣か、勝彦にも神童と呼ばれている頃があった。

「はい死んだ！今君は死んだ！」

首を括り、足元の台を蹴るとぶらぶら体が揺れた。

意思に反して体が空気を求め暴れる。

勝彦は家のガレージで首に括られたロープを外そうとのたうって
いた。
頭に血が上り溜まって、顔全体が破裂し目玉が飛び出してしまっ
錯
覚に囚われる。

外そうとして、首とロープの間に差し込んだ指が千切れそう
だ。
首に掛かったロープを引くたび、自分の体重で締め付けが増した。

「あがつ、が、くあ」

ブチリと音がしてナイロン製の首輪が外れた。

「が、あ」

胸いっぱい息を吸った。

空気をこんなにおいしいと感じたのは初めてだった。

勝彦は死ねなかった。

怖かった。死にたくなかった。

「あつ……」

自分で死ぬことさえ出来なかった。

背中汗でシャツが張り付き、額は脂汗で濡れていた。

力が抜けて、顔から新聞紙を敷いた床に突っ込んだ。

天井から伸びたロープを仰ぎ見る。

もう一度死のうという気にはなれなかった。

コンクリートの床は冷たかった。

悔しくて、

痛くて、

苦しくて、
寒くて、
惨めで、
泣いた。

これからどうしようかと呆然としてみると
視界に全身が映る大きさの見覚えのない紫の鏡が浮いていた。
あからさまに怪しかったが勝彦にとってはどうでもいいことだった。
いつそのこと、鏡から怪物が出てきて喰われてしまえばいいと思っ
た。

「これは…」

勝彦は目の前に紫の鏡が浮いているのを見て、
やっぱり自分は死ぬべきなのかと思った。
彼は20の半ばを超えていたが、紫鏡の都市伝説を思い出したのだ。
曰く、紫鏡を20歳になるまで覚えていると不幸になる、呪われる、
幽霊を見る、
全身を切り裂かれて死ぬ、内側から爆発して死ぬ、事故で死ぬ、
割れた鏡に全身を切り刻まれる。
死因は色々だがとにかく死ぬ。碌なことがない。

事実、都市伝説で不幸になるとある通り、
自分の人生にいいことなど一つもなかったと勝彦は思った。
小中高でいじめを受け、大学に進学したがぼつちであり、卒業して
も就職先がない。
フリーター、ニートと世間に蔑まれ、
「働かずに喰う飯はうまいか」
と嫌々ながらも養ってくれていた両親は先日死んだ。

自分は屑だ、塵だ。
存在する価値もない。

自殺に失敗した彼の前に紫鏡が現れることは、むしろ彼にとって自然なことと思えた。

「さあ、はやく自分を殺してくれ」

やっと無益な正に終止符をうつる。やっと苦しみから解放される。勝彦は晴れ晴れとした表情で叫んだ。

だが彼は死ななかつたし、願ったところで何も変わらなかつた。

鏡からは紫の婆も紫亀も出てこなかつた。

待つのに飽きて、勝彦は鏡面を触った。

「えっ!？」

指が鏡に張り付く。

「ちょ!待て!」

鏡はそのまま勝彦を飲み込んだ。

「嘘、人が…死んでる…」

鏡を抜けるとそこは荒野だった。

空には暗雲が立ち込めている。

枯れた大地に転がる沢山の死体。

無数の蠅の羽音と生ゴミを甘くしたような腐臭。

死体は焼け焦げ、腹の中身を晒し、渴いた土を赤黒く染めている。

死体は皆、鎧を着ていた。

矢が刺さり、手足が千切れ、爆風に薙ぎ倒されたようなものもあつ

た。

地面には剣と槍が墓標のように突き立てられていた。

「ここは、地獄だろうか。」

「だとしても、勝彦にはどうでもよかった。」

「死んでも楽になれないと知ったからだ。」

「地獄があるなら死神が居る。」

「見つけて、転がる死体のように楽にしてみらおう。」

「地獄に仏なんていないだろうが、悪魔なら居るはずだ。」

「自分は間違っ、生きてまま地獄に落ちたのだからもう一度殺してみらおう。」

「でも痛いのは嫌だな。」

勝彦は呆然としながらもふらふらと音のある方角へ向かった。

曇った空に爆音が響いた。

「鎧を着た男が向こうから吹っ飛んできて頭から岩に激突し、べちりと潰れた。」

「向こうで誰かが戦っていた。」

「地獄でも人は戦わずにはいられないのだろうか。」

「そう考えると酷く虚しくなり、勝彦の顔から表情が消えていった。」

「もうひといきじゃ。パワーを剣に。」

「いいですとも！」

「一人の男を囲んで鎧達が戦っている。」

「武器一つ付けず、鎧さえ身に着けていない男と全身鎧に身を包んだ美男美女達だった。」

「よく来たね。待っていたよ、勇者」

その言葉は優しく、全てを包み込むような口調だ。

「魔王」

美男美女達の中からひとりの青年が進み出で答えた。

「残念だけど、あなたの言葉は受け入れられない」

どうやらあそこで戦っているのは勇者と魔王らしい。

今戦っているのは最終決戦といったところだろう。

だとしたら自分はそれを見る雑魚その一だろうか、

それとも物語に触れられない背景その一だろうか。

「結果は決まっているんだよ、勇者。君や私がどうにも出来ないずつと昔からだよ」

魔王の言葉は想いに溢れていた。

魔王は闇を身に纏い、勇者は光の剣を魔王に向けた。

「光になれ ツ！」

「決してあきらめるな。自分の感覚を信じろ」

「ビッグボックスへようこそ！ 歓迎しよう、盛大になー！」

「どれお前達の肉を裂きそのはらわたを喰らいつくしてやるっ！」

「メルツエエエル！」

「すべての記憶 すべてのそのんざい すべての次元を消し

そして わたしも消えよう 永遠に！」

乱れ飛ぶ奇跡。

書き換わる地図。

剣圧ひとつで吹き飛ぶ岩山。

肉体の再生。

死者の復活。

背後で巻き添えを喰らって消滅する軍隊。

勇者と魔王の最終決戦。

英雄同士の戦いに矮小な一般人の出る幕はない。

勝彦は笑い転げた。

異世界に飛ばされたと思ったら、出来ることなく、ただの傍観者で、何も変わらない。

両者は勝彦を無視して戦いを続けている。

太陽が落ち、星が瞬きつつある頃、

周囲の山や河を巻き込みながら勇者と魔王の戦いは佳境を迎えつつあった。

「決まっている運命などない！」

勇者は剣を魔王に叩き付けた。

魔王の巨体がよろめく。

彼らの視界に自分はいない。仕方のないことだ。

自分には才気も閃きも腕力も知恵もない。そういう運命なのだ。無視されるのは当然と思えた。

魔王は目を瞑った。

「勇者という存在は知っているね？ 先天的な戦闘適者、言わば戦闘の天才だ。」

君はこの大役について疑問を抱いたことはあるかね？」

「私の力に名など必要ない。勇者などという神殿の世迷い言に

手を貸すつもりもない。世界がどうなるかと、私は私であることを望むだけだ」

世界を無視し我を貫く、それは強者だけが言える台詞だ。

弱者は私が私であることすら許されない。

無力な勝彦を無視し彼らの戦いは佳境を迎えていた。

「あつたとしても、私は認めるわけにはいかない。結果など決まつては……いないんだ」

魔王と勇者の頬を涙が伝つた。

「私が、魔王である私こそが為すべきことなのだ。理解できんと思える」

魔王は涙をぬぐうと微笑した。

「さて、最後の宴を始めようか？」

パチンと指を鳴らすと空が陰り、闇に包まれた。

闇は広がり、部屋を、城を、街さえ暗黒に飲み込んでいった。

ややあつて闇の中から光が現れる。

光は輝きを増し、闇を焼いた。

立っていた勝彦も飲み込んで。

魔王は勇者に勝てなかつた。

魔王は最後まで誰の手も借りず、一人で戦つた。

「笑わせる、偽者は私の方が」

「これで終わり、世界は救われたと、信じたい」

魔王は倒れ、仲間達は死に、彼女一人が残つた。

「痛い！痛い！痛い！痛い！」

光が視界を真っ白に染めた。

眼が焼ける。視界が真っ黒になったと思ったたら、色を感じなくなつた。

手が焼ける。足が焼ける。喉が爛れる。肺が焼かれる。

息がしたい。体が異様に寒い。毛布が欲しい。血が止まらない。喉が渴いた。水が欲しい。

勝彦は倒れ、身じろぎも出来なかった。全身が炭化していたからだ。

自分が何者であったかも考えられず、もがき、苦しんでいる。

この場から少しでも逃れようと手を動かした。

真っ黒になった手は二の腕の先からぼとりと落ちた。

息をするたび爛れた喉が痛んで、血を吐いた。

つばを飲むと痛いから、よだれは垂れ流しになった。

爛れた体を撫でる風は、肌をやすりで削り取るようだった。

あきらめや悲しみは痛みを抑えなかった。

痛みは意識を覚醒させ、勝彦を恐怖に引きずり込んだ。

走馬灯も三途の川もなかった。考えようもしなかった。

蠢く度に荒野の砂利が肉を削る。

「かぁ…………ちく」

悲鳴を勝彦は悲鳴を搾り出した。
それきり、動かなくなった。

痛みは続く、脳が動かなくなる瞬間まで人は死なない。
ただ痛かった。怖かった。

狂乱する頭の中で声が響いた。

「逃れたいか？」

「……………！！……………！！……………！！」

痛みの中で頷いた。必死だった。
もはや首すら動かせず、言葉すら考えられなかったが頷くことは出来た。

「契約を結べ、お前は魔王だ」

「……………！！……………！！」

怖かった。死ぬのが怖い。消えるのが怖い。

「礼を言う、世話をかけるな」

言葉と共に痛みはなくなった。

眼はとうに潰れている。鼓膜は破られた。触覚は死んでいる。鼻の粘膜は焼かれている。

脳内、と形容するしかない場所に映像が叩き込まれた。

映るは焼きすぎて真っ黒になったソーセイジ同然の自分の姿と先の爆発。

「君は私と勇者の戦いに巻き込まれた。そして私は…」

魔王はごそごそと動いた。

頭の中がむず痒い。記憶を探られているらしい。

不快だが、疲れきった精神ではどうすることも出来ない。

魔王は君ら流に言い換えるならと前置きして続けた。

「棺桶に全身を突っ込んでいる君を助けたわけだ」

魔王という言葉のイメージに似合わず、声は若い。

性別は男にも女であるとも聞こえた。

それって死んでるって言わないか？

「蓋は閉まっていなかった」

相当危なかったらしい。

自分でも、全身焼かれてよく助かったものだと思う。

「でだ、君は魔王になった」

は？

“ 魔合衆国大總統

統合監査アドバイザー魔王（仮）

岩塚勝彦”

魔…王…？ 仮免許？

「君の知ってる通りだ。」

西に馬に乗ったかわいい子供あれば娘を使って誘惑し、
東に魔法のランプあれば封印され、
南に破壊神あればあっさりやられ、
北に主人公あれば仲間になり、弱体化と言われる。
そんなものだよ」

魔王は意地の悪い笑みを浮かべている。そんな気がした。

「おめでとう。君は魔王見習いに選ばれた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4418j/>

他称魔王×自称自衛官×三等自営業 プロローグ

2011年1月15日23時34分発行